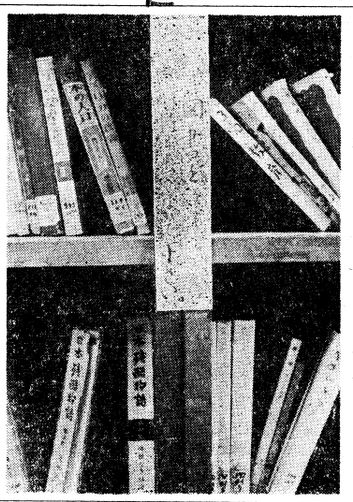
向陽新聞
高知市塩屋崎町1-1-10
土佐中・高校新聞部
編集人　水田幹久
発行人　植田哲哉
印刷　高知印刷

五十年目の堕落

六月に入り、高校生を中心にかなり多量の処分者が出た。原因は知人のアパートにたむろし、パーティを開いていたというもの。これらの一部の不良行為者を出した背景には、本校全般にわたる無気力・退廃・モラルの低下が考えられる。現に再三の注意にもかかわらず、食堂売店での割り込み、図書館の本紛失も後を断たない。また、最近掃除をまじめにやらないクラスが目につく。創立五十周年を迎えた土佐校生は、まさに〝五十年目の堕落〟とも言うべき状況をあらわしている。

図書館
困った〝本の収集家〟
貸し出し期限守られず

土佐高生のモラルの低下を示す一つとして、図書館の蔵書の紛失があげられる。今年の二月に二冊、三月に一冊、四月に三冊、さらに五月には二十一冊と、合わせて二十八冊の本が、貸し出されたまま期限が切れてもどって来ない。さらに悪質なものになると、本だなにある本をそのまま抜き取り、〝土佐校図書館蔵書〟の印を消して、私有物にしてしまった者もいる。英国の愛書家ブレイズの〝本の十個の敵〟の中に、「収集家」というのがある。「収集家」とは本を手に入れたくて盗んだり、入手した本を隠しこんだりする人々のこと。土佐校にもこまった「収集家」がいるようだ。



いたみのはげしい本もある

ブレイズの〝十個の本の敵〟のなかに、もう一つ「ちりとそまつなあつかい」というのがある。本校の図書館でも、そまつなあつかいのために、いたんだ本が目につく。特にいたみのひどいのは、事典などの大型の本。これらの本は、重量があるから、表紙だけ持って中味をブラブラさせているとそのうちに、中味と表紙がちぎれてしまう。現に、「織田仏教大辞典」や大槻文彦著「大言海」なども、このような状態になっている。さらに、読者の多い「時代」と「コース」も、たいてい表紙と裏表紙が落ちてなくなっている。

また、落書きをされた本もある。野良猫ノラにまつわる物語「ノラや」も、怪獣映画愛好家のしわざか、表紙の題字が「ガメラや」にされている。

これら合わせて、修理の必要な本が、この図書館に三十五冊。「これも時代の風潮だろうが、近頃の生徒はどうも物を大切にしなくなった」と先生方をなげかせている。

建築中の授業に疑問
新設ロッカー、カバン入らず

新校舎は当初の予定より遅れ、八月着工と発表された。そのため新校舎の青写真は細部まで検討され、構想はいよいよ大詰めとなった。

新校舎建築となると、まず問題となるのが工事中の授業。市商の貸り入れが不可能となった現在、旧校舎で授業を続行し、その間に第一期工事として高校校舎を運動場西側へ建築する。次に、第二期工事として、高校生を新校舎へ移した後、西旧校舎を壊し中学校舎を建築する予定である。しかしこの方法によると建築中のやかましさが問題となる。特に旧西校舎の各クラスは、相当さわがしくなると予想される。

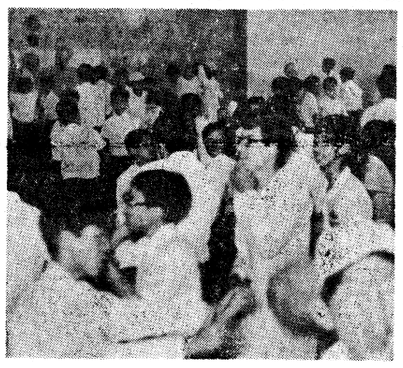
一期工事では、中三A・B・C及び剣道部室・調理室を取り壊さなければならない。中三の教室は別にプレハブを建てるか、理科・美術などの特別教室を利用するほかないようである。また、第一期工事が終了してもすぐ第二期工事に移れるかどうか、資金面からいって、あやぶまれる。さらに第二期工事が始まっても新校舎に入った高校はもとより、中学の方もやかましい事になる。しかし校長は八月中に基礎工事が終わりそうもないといっており、鉄くいを打つ音が授業に大きく影響する。また建築中は、高一の自転車置き場が取り壊され、代りに運動場に建築試材を置くなど、旧グラウンドで練習しているサッカー・バレーボール・ソフトボールなどの各クラブは、活動を大幅に制限されることになる。

次に新校舎の内部について。再三再四非難を受けて来た便所は、職員便所を含めて十三ケ所。全て水洗となり衛生の面でも、実用の面でもすぐれたものとなる。

また新校舎の大きな特徴として特別教室が充実している事が上げられる。特に理科室は、一般、地学講義室が合わせて三、生物・物理・化学の実験室が一つずつ、またそれぞれの準備室も設けられるなど理想的なものになる。社会科の方も社会一般教室が新たに設置される。また、音楽室には、壁にスピーカーが埋め込まれ、吸音設備などの音響効果の近代的なものになる予定である。現在の貧弱なピアノの変りにグランドピアノが置かれる。さらに女子家庭科において、作法室・調理室・被服室は大幅に拡張、拡充されるほか、新たに洗濯・染色室が創設されるなど広くなっていないため、窮屈さなんと千二百八人分できる。これは西校舎第三昇降口の靴箱全部の七十六倍にあたる。

またこの長さから新館の分をひくとだいたいオリンピックのマラソンコースの距離になるので未来のアベベをめざす人は学校中の床板を丹念に踏んで走るとよろしい。

新校舎の床も板張りだそうだからその分もあわせると、やっと高知高松間を往復できるがまだまだ月には程遠い。月到達を夢見た私がバカなのか、それとも宇宙が広いのか。広大無辺な宇宙にくらべ人間の所業のいかにむなしいかというお話でした。



解消されるかこの混雑

主張
低迷する生徒自治への意識

このところ生徒委員会の流会が平然とまかり通っている。前号の「声」の欄にも生徒委員会の活発化を望む意見が寄せられたが、どうやら効き目はないらしく、今では二回に一度は確実に流会になるといった始末だ。生徒委員は流会に慣れ切ってしまってだんだんと不感症に陥り、慢性化してしまっている。生徒委員の議会に対する無責任はそのまま一般生徒の自治活動に対する無関心につながると考えていいだろう。

生徒自治に対する一般生徒の関心の低さは向陽新聞においてもたびたび指摘されてきた。しかしそれは人間が理想を追い求めることでもあった。「今日は八人も欠席している。こんなことでは意味がない。解散した方がましだ」（委員四十人）といった意見が過半数を越える指示を得たようなときにも、やはり委員会への不満、一般生徒の無関心に対する批判は数多く聞かれた。このような見方をするとき、今ほど深刻に絶対的なものとして生徒自治の危機が訴えられなければならないときはないような気がする。これは土佐高だけの問題ではない。全国にも生徒活動の不振を嘆く新聞は無数にある。会を開けば定足数に足りない。役員の選挙をやれば、複数の立候補は殆んど見られない。高校新聞はそれらの現状を嘆き、生徒に自覚せよと訴える。だが一向にこういった無関心層が関心を示す様子を見せてくれないのはなぜか。確かにここ一年ほどの生徒委員会の流会記録は、本校でもおそらくは戦後、生徒会が発足して以来のことであるはずだ。しかしそれは人間が理想を追い求めることでもあった。「今日は八人も欠席している。こんなことでは意味がない。解散した方がましだ」（委員四十人）といった意見が過半数を越える指示を得たようなときにも、やはり委員会への不満、一般生徒の無関心に対する批判は数多く聞かれた。このような見方をするとき、今ほど深刻に絶対的なものとして生徒自治の危機が訴えられなければならないときはないような気がする。これは土佐高だけの問題ではない。全国にも生徒活動の不振を嘆く新聞は無数にある。会を開けば定足数に足りない。役員の選挙をやれば、複数の立候補は殆んど見られない。高校新聞はそれらの現状を嘆き、生徒に自覚せよと訴える。だが一向にこういった無関心層が関心を示す様子を見せてくれないのはなぜか。確かにここ一年ほどの生徒委員会の流会記録は、本校でもおそらくは戦後、生徒会が発足して以来のことであるはずだ。しかしそれは人間が理想を追い求めることでもあった。「今日は八人も欠席している。こんなことでは意味がない。解散した方がましだ」（委員四十人）といった意見が過半数を越える指示を得たようなときにも、やはり委員会への不満、一般生徒の無関心に対する批判は数多く聞かれた。このような見方をするとき、今ほど深刻に絶対的なものとして生徒自治の危機が訴えられなければならないときはないような気がする。これは土佐高だけの問題ではない。全国にも生徒活動の不振を嘆く新聞は無数にある。会を開けば定足数に足りない。役員の選挙をやれば、複数の立候補は殆んど見られない。高校新聞はそれらの現状を嘆き、生徒に自覚せよと訴える。だが一向に

土佐校と千円札

のとして最近では三無主義などという言葉が盛んに使われるようになった。無気力、無関心、無責任（または無感動）の三無を指しているのだと言う。他人に干渉せず享楽はだんだんと刹那的な傾向をたどり、退廃的な沈滞したムードが我々を包みつつある、と言う。それは一部を否定することはできてもすべてを否定することを許さない事実だ。土佐高生の過半数あるいはもっと多くが、この氾濫の中にあると言えるのではないか。むしろ刹那主義がなぜいけないのか。退廃がなぜいけないのか。と問い返す人間の方が多いのかもしれない。生徒は自らの手で生徒の自治を報告しようとしている。そしてそんなものには何の未練もない。いったい何が現在の無気力な高校生を生み出したのだろう。三有主義が人間の本性ではなかったのか。だとすればそれをゆがめようとしているのは何なのだろう。自治の精神を忘れた社会がどのような末路をたどるか、歴史的事実が、あるいは一枚の写真がそれを教えてくれるはずだ。

ところが我々の自治を達成するために最も基本的なものになるはずの「話し合うこと」を我々はこの学校で教わってこなかったのではないだろうか。と疑ってみる必要がありはしないか。ドライに上べだけの友情を保って行くことはできても安保を話し、沖縄を話し合うとき、もうすでに亀裂が生じるのではないだろうか。たまにまじめな話をするとき、みんなの意見がバラバラなものであるかに驚かされることがある。そしてときには感情を向き出してけんかみたいな討論にさえなるのだ。こういったことに触れないで上べの平和を保って行くことが言わゆるカッコイイ現代っ子の行き方なのかもしれない。断絶を無理に浮き彫りにしないでそっとしておくことが楽にちがいない。しかし、それではますますバラバラになりはしないだろうか。その前に私達は本当につながってはいないのか。

掃除
やっているのは七割弱の人

掃除に関しては、各クラスにアンケートを配布して、回答してもらった（中高合計十六クラス）。その結果、掃除の形式は一班あたり六人が一番多く続いて十人。担当日数は三日・一週間・一日の順。かんじんの出席率は、百％三クラス、九十％一クラス、八十％四クラス、六十％四クラス、さらに五十％以下が四クラスもあった。しかし、平均としては七割弱程度。原因は〝さぼり〟がほとんどだが一日毎に担当の班が交替するところでは、ついうっかり忘れていたというケースも多い。

具体的な事については、

廊下をやっている　七クラス
時々やっている　七クラス
全々やってない　二クラス
机をふいている　〇クラス
時々ふく　二クラス
全くふかない　十四クラス

と、机はほとんどふいてない。ガラスは、美化の日以外ふかれていない。

掃除に要する時間は、二十分前後がほとんど。なかには、三十分もかけるところや、十分で済ましてしまうクラスもある。

この資料をもとに、掃除の実情を見て回った。出席は男子より女子がいい。ここにも「男子より女子がまじめ」という現象があらわれている。〝さぼり〟のなかには代用人に頼んであったのが、代用人もさぼってしまう傾向もある。

食堂・売店
多い〝頼み込み〟

盛況を呈している食堂・売店では、いつも長蛇の列ができる。食堂では、腹をすかした生徒が、渡まで続く。あまりの長さに、つい割り込みをしたくなる。販売窓口の近くに待期して、ころあいを見計らって窓口に駆け寄る。そして今まで並んでいたかのような顔をして、すばやく買って行く。

割り込みをする〝勇気〟のない者は、列の前の方にいる友人に、自分の分も買ってくれと頼み込む。このケースは、割り込みに比べると非常に多い。「友人にちょっと頼むくらい、別に悪いことじゃない」という意識が生徒の間でも強い。しかし、食堂で、一人の者が二人分も三人分も〝そば〟を買えば、それだけ後に並んだものを待たせることになる。確かに親しい友人や先輩から「買ってくれ」と頼まれたら、断わりにくい。しかし、まじめに並んで自分の番の来るのを待っている者を考えれば、毅然とした態度をとることが必要。不当な割り込みや頼み込みを見かけたら、その場で注意する〝勇気〟も大切と言えそう。

その他、床を一部しかふいてない。雑談が多い、隅にチリが残っているなどが目につく点。

ひとこと

○…校内において放送が最も重要な報道手段であることは言うまでもない。今期生徒会は現在までに、二万六千百五十円を出費、残金わずか千六百四十五円とみじめな状態になっている。そして、活動ができない理由で特別費を要求しているが、出費の中でも無計画な機関紙発行が大きなウエイトを占めている。これは広報の充実により、生徒会への無関心の解消を図ったものと思われるが、この点で潮江中学校生徒会の方が賢明だと言える。同校では朝八時二十分ながらラジオを聞くという器用な者が多くなった。なぜ深夜放送を聞くんだい。と尋ねると、ユーモアがある。さびしいから。アナウンサーの声にしびれる。などと、人それぞれであるが、その放送のほとんどが音楽番組。中には教室にある放送部のスピーカーより感度の悪そうなラジオで聞いているヤツもいるのだから、学校で昼休みに音楽を流して、駄じゃれの一つや二つ飛ばせば、結構いけるのではないだろうか。これまでお隣りさんの潮江中のお話。

お昼の軽音楽

五分から及び、午後三時十分からそれぞれ十分間、学校あいは生徒会からの報告を行なっている。なるほど機関紙を発行するために一日をつぶしてしまうような事もない。しかしこの放送への学校側の態度は非常に冷たい。それは学校用の配線は放送部には使用させない。と言っており放送が軌道に乗っていない大きな原因となっている。

○…話は変わるが、最近の〝ながら族〟の増加には目覚しいものがある。ラジオを聞きながら勉強する。あるいは勉強しながらラジオを聞くという器用な者が多くなった。なぜ深夜放送を聞くんだい。と尋ねると、ユーモアがある。さびしいから。アナウンサーの声にしびれる。などと、人それぞれであるが、その放送のほとんどが音楽番組。中には教室にある放送部のスピーカーより感度の悪そうなラジオで聞いているヤツもいるのだから、学校で昼休みに音楽を流して、駄じゃれの一つや二つ飛ばせば、結構いけるのではないだろうか。これまでお隣りさんの潮江中のお話。

五分から及び、午後三時十分からそれぞれ十分間、学校あいは生徒会からの報告を行なっている。なるほど機関紙を発行するために一日をつぶしてしまうような事もない。しかしこの放送への学校側の態度は非常に冷たい。それは学校用の配線は放送部には使用させない。と言っており放送が軌道に乗っていない大きな原因となっている。

○…話は変わるが、最近の〝ながら族〟の増加には目覚しいものがある。ラジオを聞きながら勉強する。あるいは勉強しながらラジオを聞くという器用な者が多くなった。なぜ深夜放送を聞くんだい。と尋ねると、ユーモアがある。さびしいから。アナウンサーの声にしびれる。などと、人それぞれであるが、その放送のほとんどが音楽番組。中には教室にある放送部のスピーカーより感度の悪そうなラジオで聞いているヤツもいるのだから、学校で昼休みに音楽を流して、駄じゃれの一つや二つ飛ばせば、結構いけるのではないだろうか。これまでお隣りさんの潮江中のお話。

五分から及び、午後三時十分からそれぞれ十分間、学校あいは生徒会からの報告を行なっている。なるほど機関紙を発行するために一日をつぶしてしまうような事もない。しかしこの放送への学校側の態度は非常に冷たい。それは学校用の配線は放送部には使用させない。と言っており放送が軌道に乗っていない大きな原因となっている。

○…話は変わるが、最近の〝ながら族〟の増加には目覚しいものがある。ラジオを聞きながら勉強する。あるいは勉強しながらラジオを聞くという器用な者が多くなった。なぜ深夜放送を聞くんだい。と尋ねると、ユーモアがある。さびしいから。アナウンサーの声にしびれる。などと、人それぞれであるが、その放送のほとんどが音楽番組。中には教室にある放送部のスピーカーより感度の悪そうなラジオで聞いているヤツもいるのだから、学校で昼休みに音楽を流して、駄じゃれの一つや二つ飛ばせば、結構いけるのではないだろうか。これまでお隣りさんの潮江中のお話。

不良化問題
大量の処分者出る

現在の土佐校には、無気力・退廃的な空気がみなぎっている。その一つのあらわれとして、不健康な雑誌・マンガが教室で回覧されているという現状がある。さらにカンニングの常習化などの現象もある。

このような空気のなかで、一部生徒の不良行為が問題になり。かなり大量の処分者が出た。これはパーティと称して、知人のアパートに集まり、飲酒や喫煙その他の不良行為をしていたことによるもの。これら大量の処分者の中には飲酒・喫煙の事実はなくても、このアパートに出入りしたというだけで処分された者もいる。また、いわゆる学校処分でなく補導という形のものもあるという。

今度の大量処分について、松浦先生はその原因を「勉強・クラブ活動への意欲喪失から、安易な娯楽へと走り高校生としての〝ワク〟を踏みはずすことになるのだ」と言っている。また、これまでの学校の対策について「学校としては、こういった問題の起こる前に、事前に調べ充分な非行防止に努めたいと思っている。しかし生徒からの投書などもそれをそのまま信用することもできず、事前の調査・指導もむつかしい』とこういった問題のむつかしさを語られた。さらに、今後の対策としては「なにより生徒自身の自覚が大切。それに、友達同志の真の友情によって、友人の非行化にストップをかけるようにしてもらいたいものだ。生徒にとって何より身近なのは、友人ではないだろうか。〝お客〟を修繕し使用させる意向である。プールも七コース・二十五メートルに新設され、浄化装置が付き、プランクトンとの共泳は免れそう。

また未定のまま残されている騒音、照明は生徒の反響が強かっただけに、今後の大きな課題となろう。

〝お客〟を修繕し使用させる意向である。プールも七コース・二十五メートルに新設され、浄化装置が付き、プランクトンとの共泳は免れそう。

また未定のまま残されている騒音、照明は生徒の反響が強かっただけに、今後の大きな課題となろう。

〝お客〟を修繕し使用させる意向である。プールも七コース・二十五メートルに新設され、浄化装置が付き、プランクトンとの共泳は免れそう。

また未定のまま残されている騒音、照明は生徒の反響が強かっただけに、今後の大きな課題となろう。

ピックアップ

西野先生還暦おめでとう

この写真は去る６月12日農協会館で行なわれた西野元彦先生の還暦祝賀パーティのスナップである。当日は本校の先生方をはじめ同窓会の卒業生約百名が出席して盛大に開かれたもの。

今年数え年61才を迎えられた西野先生は、〝１才に戻った〟という事から、送られた真赤なちゃんちゃんこととそろいの帽子をかぶり、会場からの拍手に恥ずかしそう。そのあと先生は出席者の１人１人にカーネーションの花を配り会場はなごやかな雰囲気に包まれていた。

さてこの会の取材兼受付手伝いに行った新聞部員、最初に１人分あとで２人分、計３人分の折り詰をもらい、大喜びしたのだが、翌日早速体重が増え困っている次第。

校内短信

◇……山本登先生（前二Ｋ主任）が休まれていた間、二Ｋの主任をつとめていた岡部先生（理科）はこのほど正式に同クラスの主任になった。理由は、山本先生が心臓衰弱のためクラス主任の仕事ができなくなったため。岡部先生は、「二Ｋというクラスを、まだハッキリつかんでいないが、集団の中のしつけなどによって協調性あるクラスにしたい」と話している。

◇……二Ｈ（主任西森先生）では六月十七日に学級短信を発刊した。これは〝クラスにまとまりを〟との目的で西森先生が原紙刷りしたもの。生徒の主張などを載せている。

◇六月三十日の放課後、講堂において高二の五クラスで合同ホームルームが催された。紅白歌のベストテンと題して、紅白各五組の歌手が自慢のノドを披露した。会場はヤンヤヤンヤの盛況で、仲々好評をはくした。

◇……こんにちは

こんにちは世界の国からこんにちは……。という歌い文句で始まる日本万国博覧会は早五ケ月目を経過した。当所は事故など不手際が重なったが、新聞、テレビは毎日のように〝万博〟〝万博〟またワ・タント事務総長、イギリスのチャールズ皇子、チェコのスボボダ大統領など世界の要人も訪れ、日増しに人気が高まり、その人気は重いカマスの腰も動かしたのである▼アジアで初めてということもあり、入場者は世界じゅうから集まる。でも「期待をかけすぎてがっかりした」「ただ写真、スライドであまりおもしろくない」など肩すかしをくわされて不満タラタラ。つまり人気が先走って内容がそれに追いつかないようである。その例としてアメリカ館では、興味をひくのが月の石だけで後は飾り物にすぎない。だが、各外国館で行なわれている自由紹介の短編映画は好評のようである。風景の色彩もすばらしいが、お目当てはビキニ姿の女性かな▼万博はまた人の多いことでも、我々田舎者は目を回す。高知市の二倍以上の人が会場で見物するのだから、うっかりすると、万博へ人を見に行ったことにもなりかねない。そして混雑のため、各館平均して約二十分ぐらいは待たなければならない。でも、本校食堂のように割り込む人はいない。このように足が棒になるまで待って館内に入っても休息できる場所がなく、一館見終るとその肉体的及び精神的な疲労は相当大きい。そのせいか、館外のベンチは人でいっぱい。団体のおばあさん達は歩道にぺったり▼万博は見るだけでなく買う楽しみも大きい。各国のお国自慢が軒を並べている国際バザールは人気の的だ。僕も例にもれず、行ってみたがその値段の高さに舌を巻いてしまった。万博とはいったい金もうけのためにするのだろうか。自分達の国を知ってもらうために開くのではないか。ばか高い商品が飛ぶように売れているとは、日本人は何てお人よしなのだろう。しかしまだ高いだけならがまんできるが、外国商品の中にメイド・イン・ジャパンと書いてある物が混じっているとのこと、まったく踏んだりけったりだ。▼ここで「おらあ万博やめた」なんて言うのは早計。ある先生曰く「僕は万博に行って戦前から待っていた外国に対する偏見がなくなった」と。これはちょっと大げさかもしれないが、外人に話しかけられて困っているおばさん、また勇ましく流暢（ちょう）な英語で外人と話している学生を見ると「やはり万博だなあ」と感じてくる。また、土佐の美女達を見慣れている諸君も、各国のホステスにはびっくりして卒倒するのだろう。サインを求めると笑顔で応じてくれて、日頃女性に相手にされない諸君らでも夢ごこちにおちいるだろう▼昔からのことわざにあるように「百聞は一見にしかず」まさにこの通り、もし金とひまのある方は一度行ってみたまえ。しかし土佐高校生であるからには、その各館のテーマなどしっかり読みとり、ただの見物には終って欲しくない。

（Ｍ・Ｋ）

土佐名産サンゴと
宝石は
池田サンゴ店
高知市帯屋町一丁目
TEL ㉒ 0358

〝土佐名産〟
特製〝金波〟
立石（重馬）蒲鉾店
高知市京町４
大丸東側 TEL ㉒6279
（野村証券北隣）

趣味の陶器を沢山揃えております
依光陶美堂
高知市オビヤ町 TEL ㉒ 2321

中華料理
龍園
高知市梅ノ辻57番地
電話 ㉝ 5271 番

設備の改築も必要
新グラ使用の場合

今年の運動会は学校側が新校舎建設のため使用できず、新グラウンドで開催する場合にも、貧弱な便所・水道など設備の拡充を必要とするほか、やぐらを建てることによって、栗石・バラス・タンガスなどを重ねてに綿密設計されたグラウンドを混ぜ返し、排水が悪くなるなどの弊害を伴うことになる。

来学期にひかえた運動会について、校長は次のように語った。

「まず問題になるのは設備の点だ。新グランドで開くとすれば、便所を改築しなければならないし、水道も補強しなくてはならない。また道具の持ち運びのため多少不便になるだろう。それにまだ決まったわけではないが、新グランドを使うのは今年だけで来年からは旧グランドで開くという可能性が強い。今年だけ、どこか他の場所を借りることも考えられる。とにかく、できるだけ運動会は開きたいと思うが今のところまだ何も決まっていない」

既に体育科の先生の間では運動会を開きたいという方針が決定されているのだが、現在のところ、開催できるかどうかも危ぶまれている段階である。こういった状態の中で、去る六月二十五日には体育科の橋本先生、永野先生と執行部の間で運動会について、今後の見通しが話し合われた。（以下その内容を記す）

執行部―まず運動会を開ける見込みはあるのか。

先生―学校側としては校舎新築のことにかかりきっていて、運動会については全く話し合われていない。まだ何とも言えない。

執行部―開催するとすれば新グランドで開くことになるだろうが、やぐらについてはどう考えるか。

先生―やぐらの柱でいくつも穴をあけることになるとグランドが痛みそうだ。そのため野球部など運動部の活動に支障を来たすことになる。

執行部―パイプ式のを使えば穴もそんなに掘らないで済むと思うのだが。

先生―パイプ式であればほとんど問題はないだろう。

執行部―それにしても、学校側が働いてくれなければ全く進展しない。

先生―校舎新築の問題が一段落するまで待ってほしい。

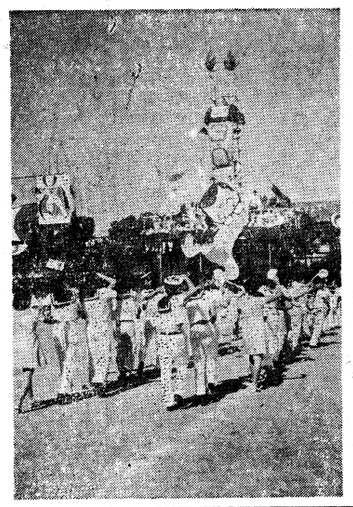
執行部―早くしないと夏休みに入って結局、来学期に持ち越されることになりかねない。新グランドで開催するとすれば、もうそろそろ便所や水道を新設するための見積りなんかを始めなくてはまにあわないのでは。

先生―それはそうだ。校舎新築の方は今週中には片が付くと思っている。次の職員会あたりで、運動会についての具体的な話し合いが開始されるのではないだろうか。今のところ体育科の会をもって、体育科としてはやりたいという段階でしかない。しかし、旧グランドが使えないから運動会を開かないというようなことはまずないと思っている。

運動会についての一般生徒の意見はさまざまである。

『旧グラがだめなら新グラでやろうじゃないか。便所や水道のための費用はこの際、仕方がない』という声がかなり支配的のようだが、中には『運動会が開かれなくても、どうということはない』『運動会なんかなかった方がましだ』といった意見も聞かれ、この機会に改めて運動会の意義が問われている。

また校長が先に述べたように、来年から運動会が旧グランドで再開されることになれば、校舎新設のためグランドが大幅にせばめられてしまうだけに、やぐらの廃止、各教室を来賓用の驚席に使うなど従来の運動会の規模や形式に大きな変化を来たすのではないかと見られている。



来学期の運動会
校舎新築で開催危し！

〝根拠がうすい〟
他校との交流禁止

本校と他校との交流活動は三年前、つまり一九六七年二月、私立五校（土佐女子・清和・学芸・高知・土佐）執行部懇談会禁止令が、私立高校校長会議より出されて以来、格別大した活動もなくいわゆる停滞状態にある。この懇談会というのは執行部の定期的な会合で、各校の諸問題をそれぞれの立場からアドバイスしようとの目的で行なわれていたものだ。禁止の主な理由は、他校のある校長より提出された、校風が乱れる恐れがある、ということだった。これは当時、乱世状態にあった大学紛争の影響を恐れての判断とも考えられる。曽我部校長は「校長会はあくまでも学生の態度というものを重視して教育的に検討し合う場である。だからそれをもとに諸問題をケースバイケースで判断している。そこで適当とみなせないものは禁止となっても当然だ。だが他校との交流を全面的に禁止しているのではない」と語っていた。

さて本校の交流活動は、十数年前から県内あるいは県外と盛んに行なわれていた。県内では他校との授業の交換や、前述の執行部懇談会、新聞部の研修会、県外においては四国高校合同弁論大会なども主催していた。これらは概してそれぞれに有意義な結果が得られていたようである。又教師の間でも授業の研修会などが開かれていた。これは現在でも続いている。ところでこれら学生の交流は一九六七年頃までは（中には途中で姿を消したものもあったが）定期的に続いていた。が先に書いた禁止令が出されてから他のものも衰退して、現在では文化的交流は行なわれていない。この衰退の理由、生徒が認識不足で働きかけが不充分であることも上げられようが、主なものは他校の校長の力が想像以上に強く作用していることである。今年の一月になって市内のある高校の新聞部から交流復活の話が持ち込まれていたが、そこの校長が禁止策をとっているため進展が見られないままになっていた。

他校の交流は一校だけの問題だけでなく、全学生としての立場からの交流であることは明白だ。それだけに、停滞状態再考の必要を説く向きも一部にはある。このようにこの問題は、今流内密にされていた問題だけに、これからの動きが注目されよう。

一昨年の運動会のもよう

校舎改築によせて
先生出番です

扇谷隆男先生

あれはいつのことだったか、確か昭和十八年の春陽のまどかなある日のことだった。入試前日の下検分の為に、この学校に初めてやって来た時のことだ。―田舎から来た男女四名の同級生とその母親達と共に―「今まで見て来た中で（既に城東中―現追手前高、海南中―現小津高、土佐女子中を訪れた後だったから）一番見劣りがするの？。木造やのう。けんど生徒の少ない割には校舎は広いやいか」というのが我々の評であった。今の東校舎と南校舎が同じように二階建て（もっとも、今二〇近二階で一階は一A近）で北校舎は寄宿舎だった。

受験前の入れ知恵の為も多分一、いや日本にないドイツ製の逸品であるとか（先輩平井康三郎氏はその為に生まれたとか？）英・数・国はどこの中学よりも一冊書物が多いとか、ラグビーは中二からやるんだとか、いずれも何かプラスする面も多かった。もっとも、その逸品のピアノで教わったのがラッパの呼称法であったりしたのは、悲しい時代の我々だった……。

一日も早く同じ校舎でという願いが叶いそうになったのは、一年後も近い頃だろう。戦時中海軍の兵舎であった廃屋を、三里から職員・生徒で運び出し校舎を作ろうということになった。身体の疲労も厭わず、学習の遅れも今にみろと全員協力一致、校舎作りに専念した。出来上った校舎は、当然のことながら酷いものだった。風の強い日には床下の灰がもくもくと立ち影響したことだろうが、なぜかゆかりのある、威厳のある学校という考えが私を捕えた……。

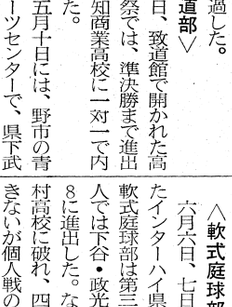
思えば玄関脇（たぶん門柱は昔のままだろうが）の竹藪、運動場の周囲の楠の晩秋から初冬にかけての落葉拾い、夏草茂った運動場の除草（当時はトラク以外はすべて芝生）プールの苔落しと汗と涙に日をすごしたことも多かった。又沢山の自慢の事物もあった。ピアノは四国悪戯父々の生活を共にしたこち、雨の激しい日には傘を出して授業を受けた。でも、この不便な、不充分な校舎で、誰ともどこともなく、立派な校舎ではっている他校の生徒に、ひけはとるまいという気風が芽生え、成長を続けた。それはあの入学当初から一貫して来た気風でもあった。

その後、現校舎が改築された経過は知らないが今度改築されれば四回目、いや正確には仮校舎から数えれば五回目になる。

この改築を一日も早くと心から願いながら、一抹の不安を感じるのは何故であろうか。

「土佐高生はみのだけ立派だ」「土佐高は落ち目か」「本当の土佐高の生徒は一部だ」との巷間の噂は一笑に付してよいか。馬鹿な中傷に耳を貸す必要はないが、私には単に有名校への進学のみを批評の対称としていないように思える。時代は変わったとは言え「みの」でない真の矜持をしっかり持たなくてはならないと思う。

七月着工の声を耳にする今、新しくすばらしい校舎の中で、見事開花する芽を強く、着実に育てることこそ急務であろう。



修学旅行
バスに揺られて1週間

どぎもを抜かれた新大阪

出発の朝は、雨もあがった。低気圧は、もう通り過ぎたのだ。でも、やっぱり鉛色の雨雲が空をおおっている。新幹線だと、また低気圧に追いついてしまうんじゃないか。そんなことを思いながら高知駅を出た。

池田を過ぎたあたりから、とうとう降り始めた。吉野川の流れも濁っている。しっとりとした空気が汽車の中までつつんでしまった。はしゃぐ者もいない。なんだか急にわびしくなった。はや旅愁が身についたのか、と思う。雨の汽車旅行もいいものだ。

高松で連絡船に乗り継ぎ、宇野からは電車で新大阪まで来た。「新」が付いただけあって、近代的な駅だ。構内に入るなり、ゴォーンというジェット機の爆音のような音に、どぎもをぬかれた。二階にあるとホームに出る。さっきの音の原因がやっとわかった。なんのことはない。ホームに列車が入った時の振動が、下に響いたのである。ホームは、意外に殺風景な所だった。発車を待つ「ひかり」のわきで、煤煙にまみれたすずめが、何もないコンクリートの床をつついている。奇妙な対照だと思った。

先生は〝寝ずの番〟

新大阪を出て、万博会場を遠望したかと思うと、はや京都の寺院のたたずまい。新幹線の車窓も、いろいろおもしろい対照を見せてくれた。

六時前には静岡に着く。夜、市街に出てみる。たいしたことはない。地下街があったのが、高知と違うくらいのものだ。

修学旅行第一夜は、慣れないせいか、いろんな珍事が起きた。点呼の時のこと。日頃おとなしいTが見あたらない。幸いよその部屋から遊びに来ていたKが返事をする。が、先生は不審をいだいたらしい。もう一度Tの名を呼んだ。Kがもう一度答える。ところへTが本人が、これもうわずった返事をしながら帰って来た。万事休す。Tは「便所に行ってました」をくり返して許されたものの、Kの方は、自分の部屋に引っぱって行かれた。消燈後も先生の監視がきびしくて、とうとうKをつれもどすことはできなかった。

たいそう腹のたったこと

二日目からはバスの旅。夕べさわいだせいもあって、バスの中ではねむりどおしだ。いつの間にか白糸の滝についている。滝つぼあたりまでおりて、全身に霧のようなしぶきを浴びる。滝に打たれたような気持ちだ。やっと目がさめた。目はさめても、富士はいっこう姿を見せてくれなかった。

白糸の滝をあとに、富士五湖へ。本栖湖だったか、最初の湖は樹海につつまれて、よかった。河口湖など俗化していていけない。

いよいよ五合目へと登る。霧であたりの眺望はまるできかない。五合目近くになると、やっと晴れてきた。でも、山頂はやっぱり霧だ。目的地につく。そとは、そんなに寒くない。クーラーのききすぎたデパートくらい。記念品をくれるというので、近くのみやげ屋に入る。もらったのはただの鈴、ばかにしている。こんなものもらいに、富士五合目まで登ったんじゃない。と憤慨を吐いてもあとのまつりだ。何をする間もなく下山。ところどころに残雪をたたえ、しっとりと霧にぬれた針葉樹だけが、印象に残った。

富士から箱根へ。箱根は、みやげの屋しかない小さな町だ。わざわざこんな所まで来ることはなかった。

三日目も雨。雨のなか、遊覧船で芦ノ湖を縦断する。小さな船に大勢乗ったので、雨をしのぐ所のないのには弱った。いっそぬれるなと上甲板に出てみる。両岸にそそり立つ山々が、けぶって見える。雨の芦ノ湖はよかった。

三日目は昼飯を食っただけ

「天地のわかれし時ゆ…」とうたわれた富士の高嶺は一度も見ないまま、御坂を越える。くだってくると、あたりはぶどう畑ばかり。一時をとっくに回ったというのに、まだ諏訪湖に着かない。それまで昼食はおあずけだ。空腹にもめげず、ガイドさんはよくしゃべった。「半殺しにしようか、皆殺しにしようか」というのは、この方言で「おはぎにしようか、ぼたもちにしようか」ということだそうだ。

諏訪湖も河口湖と同じ、俗でだめな所だ。おまけに、昼食はひどかった。旅館の御主人らの見送りを受けながら出発。曇り空ではあったが、信州の高地のバスドライブは快適そのものだ。窓外には白いりんごの花も見える。小諸懐古園には十時すぎに到着。古風な藤村記念館を見物する。入り口をはいった所に、有名な『千曲川旅情のうた』を書いた色紙がかけられてあった。見ているうちに、文豪・島崎藤村に親近感が湧いてくる。彼の生徒の作文へのていねいな添削などは、人柄がよく現われていた。懐古園名物のおじいさん奏でる草笛の音は、素朴で哀愁をおびていた。懐古園はしっとりと落ち着いた雰囲気がただよっていた。

演芸大会では先生方もハッスル

湖水はブルー。写生欲が思わず湧いてくる光景だ。榛名湖を後にすると利根川の上流が見えてきた。急流だ。盛んに泡はかり出ていた。それからの圧巻はやはり三国連山だろう。山頂に雪をいただく白樺湖に着くと天気もいささかよくなった。他にする事もないからボートに乗る。霧もすっかり晴れて、雲の切れ間から夕日が顔科山の山腹を照らす。冬はスキー場になるのだろう、雑木林は刈り取られて、リフトのようなものも見える。

ボートをおりて湖を一周。旅館にもどるころには、また霧が湖面をおおって、白樺もその中に消えてしまった。（M・I）

小諸では藤村記念館を見物

朝は霧もすっかり晴れ、あたり一面ただよう冷気が、さわやかだった。旅館の御主人らの見送りを受けながら出発。曇り空ではあったが、信州の高地のバスドライブは快適そのものだ。窓外には白いりんごの花も見える。小諸懐古園には十時すぎに到着。古風な藤村記念館を見物する。入り口をはいった所に、有名な『千曲川旅情のうた』を書いた色紙がかけられてあった。見ているうちに、文豪・島崎藤村に親近感が湧いてくる。彼の生徒の作文へのていねいな添削などは、人柄がよく現われていた。懐古園名物のおじいさん奏でる草笛の音は、素朴で哀愁をおびていた。懐古園はしっとりと落ち着いた雰囲気がただよっていた。

演芸大会では先生方もハッスル

湖水はブルー。写生欲が思わず湧いてくる光景だ。榛名湖を後にすると利根川の上流が見えてきた。急流だ。盛んに泡はかり出ていた。それからの圧巻はやはり三国連山だろう。山頂に雪をいただく白樺湖に着くと天気もいささかよくなった。他にする事もないからボートに乗る。霧もすっかり晴れて、雲の切れ間から夕日が顔科山の山腹を照らす。冬はスキー場になるのだろう、雑木林は刈り取られて、リフトのようなものも見える。

ボートをおりて湖を一周。旅館にもどるころには、また霧が湖面をおおって、白樺もその中に消えてしまった。（M・I）

夜さわいで、昼ぐったり

どぎもを抜かれた新大阪

出発の朝は、雨もあがった。低気圧は、もう通り過ぎたのだ。でも、やっぱり鉛色の雨雲が空をおおっている。新幹線だと、また低気圧に追いついてしまうんじゃないか。そんなことを思いながら高知駅を出た。

池田を過ぎたあたりから、とうとう降り始めた。吉野川の流れも濁っている。しっとりとした空気が汽車の中までつつんでしまった。はしゃぐ者もいない。なんだか急にわびしくなった。はや旅愁が身についたのか、と思う。雨の汽車旅行もいいものだ。

高松で連絡船に乗り継ぎ、宇野からは電車で新大阪まで来た。「新」が付いただけあって、近代的な駅だ。構内に入るなり、ゴォーンというジェット機の爆音のような音に、どぎもをぬかれた。二階にあるとホームに出る。さっきの音の原因がやっとわかった。なんのことはない。ホームに列車が入った時の振動が、下に響いたのである。ホームは、意外に殺風景な所だった。発車を待つ「ひかり」のわきで、煤煙にまみれたすずめが、何もないコンクリートの床をつついている。奇妙な対照だと思った。

先生は〝寝ずの番〟

新大阪を出て、万博会場を遠望したかと思うと、はや京都の寺院のたたずまい。新幹線の車窓も、いろいろおもしろい対照を見せてくれた。

六時前には静岡に着く。夜、市街に出てみる。たいしたことはない。地下街があったのが、高知と違うくらいのものだ。

修学旅行第一夜は、慣れないせいか、いろんな珍事が起きた。点呼の時のこと。日頃おとなしいTが見あたらない。幸いよその部屋から遊びに来ていたKが返事をする。が、先生は不審をいだいたらしい。もう一度Tの名を呼んだ。Kがもう一度答える。ところへTが本人が、これもうわずった返事をしながら帰って来た。万事休す。Tは「便所に行ってました」をくり返して許されたものの、Kの方は、自分の部屋に引っぱって行かれた。消燈後も先生の監視がきびしくて、とうとうKをつれもどすことはできなかった。

たいそう腹のたったこと

二日目からはバスの旅。夕べさわいだせいもあって、バスの中ではねむりどおしだ。いつの間にか白糸の滝についている。滝つぼあたりまでおりて、全身に霧のようなしぶきを浴びる。滝に打たれたような気持ちだ。やっと目がさめた。目はさめても、富士はいっこう姿を見せてくれなかった。

白糸の滝をあとに、富士五湖へ。本栖湖だったか、最初の湖は樹海につつまれて、よかった。河口湖など俗化していていけない。

いよいよ五合目へと登る。霧であたりの眺望はまるできかない。五合目近くになると、やっと晴れてきた。でも、山頂はやっぱり霧だ。目的地につく。そとは、そんなに寒くない。クーラーのききすぎたデパートくらい。記念品をくれるというので、近くのみやげ屋に入る。もらったのはただの鈴、ばかにしている。こんなものもらいに、富士五合目まで登ったんじゃない。と憤慨を吐いてもあとのまつりだ。何をする間もなく下山。ところどころに残雪をたたえ、しっとりと霧にぬれた針葉樹だけが、印象に残った。

富士から箱根へ。箱根は、みやげの屋しかない小さな町だ。わざわざこんな所まで来ることはなかった。

三日目も雨。雨のなか、遊覧船で芦ノ湖を縦断する。小さな船に大勢乗ったので、雨をしのぐ所のないのには弱った。いっそぬれるなと上甲板に出てみる。両岸にそそり立つ山々が、けぶって見える。雨の芦ノ湖はよかった。

三日目は昼飯を食っただけ

「天地のわかれし時ゆ…」とうたわれた富士の高嶺は一度も見ないまま、御坂を越える。くだってくると、あたりはぶどう畑ばかり。一時をとっくに回ったというのに、まだ諏訪湖に着かない。それまで昼食はおあずけだ。空腹にもめげず、ガイドさんはよくしゃべった。「半殺しにしようか、皆殺しにしようか」というのは、この方言で「おはぎにしようか、ぼたもちにしようか」ということだそうだ。

諏訪湖も河口湖と同じ、俗でだめな所だ。おまけに、昼食はひどかった。旅館の御主人らの見送りを受けながら出発。曇り空ではあったが、信州の高地のバスドライブは快適そのものだ。窓外には白いりんごの花も見える。小諸懐古園には十時すぎに到着。古風な藤村記念館を見物する。入り口をはいった所に、有名な『千曲川旅情のうた』を書いた色紙がかけられてあった。見ているうちに、文豪・島崎藤村に親近感が湧いてくる。彼の生徒の作文へのていねいな添削などは、人柄がよく現われていた。懐古園名物のおじいさん奏でる草笛の音は、素朴で哀愁をおびていた。懐古園はしっとりと落ち着いた雰囲気がただよっていた。

演芸大会では先生方もハッスル

湖水はブルー。写生欲が思わず湧いてくる光景だ。榛名湖を後にすると利根川の上流が見えてきた。急流だ。盛んに泡はかり出ていた。それからの圧巻はやはり三国連山だろう。山頂に雪をいただく白樺湖に着くと天気もいささかよくなった。他にする事もないからボートに乗る。霧もすっかり晴れて、雲の切れ間から夕日が顔科山の山腹を照らす。冬はスキー場になるのだろう、雑木林は刈り取られて、リフトのようなものも見える。

ボートをおりて湖を一周。旅館にもどるころには、また霧が湖面をおおって、白樺もその中に消えてしまった。（M・I）

雨の芦ノ湖を遊覧船で縦断

外人客の多かった日光

出発は八時。男体山がのっそり構えている。戦場ケ原を通るとすぐ華厳の滝。余り華厳でもないが百メートルの奔落の姿を見つめていると、飽きることはなかった。周囲の新緑との対比が美しかった。華厳の滝から第二いろは坂にはいる。第一いろは坂と合計でカーブが四十八。運転手さんが上手にカーブを切る。その度にヤンヤヤンヤの拍手がわき起る。ゆられゆられて九時頃日光到着。さっそく一時間半コースを歩く。華麗な建築物ばかりで驚かされる。豊富なその色彩。金・銀・朱・緑・黒…。確かに見事だ。陽明門・唐門…。そして確かに贅沢すぎると思った。貴重なものばかりだろうがどうもいけない。現実の華々しさの裏に何かその当時の下層階級の生活の訴えが、反射的に聞かされているような感じで…。やはり日光観光はその対象を素直に感じとるべきなのだろうか。ところでやはり、日光。万博の関係か外人観光客の団体がよく目についた。そこで待ってましたとばかりに青い目のオンチャン、オバチャマに、ジェスチャーよろしく会話している光景もチラホラ見られた。昼食後、日光を発つ。一路東京へ。杉並木を通る。総数何と二万六千本木影が涼しい。宇都宮からは国道四号線にはいる。窓外の田園風景をながめながら、いつの間にかいねむり街道にはいる。（H・O）

躍動する東京

車掌さんの言葉に歓声はとだえ、みんな窓の向こうに目をみはった。東京に入る。煙色のしかし、そんなに暗くもなく何も写し出さない梅雨のうっとうしい毎日に編集も思うように運ばず、いらだちの気持から中一部員になり散らすのも一日に一度や二度。いやいや五度や六度。少々のどが痛むなんのことやら。それから写真部の山下君にはずばらしい写真を撮っていただき、厚く感謝しなければなりません。

▼おわび▲

前号新任紹介の西峯先生は関西学院大学となっていましたが、関西学院大、大学院卒、また永野先生の昭和二十年生を昭和二十二年と、短信の西森先生の住所、春野町を伊野町と訂正します。数多くの誤りを残した事をおわびします。特に永野先生には、デリケートな心を傷つけはしなかったかとそれが気がかりです。

体操の授業中に賊侵入

六月八日、三Cの教室に賊が入り、現金二千四百円が盗まれた。賊は、二時間目の体操の授業中にしのびこんだもので、三人の生徒のさいふから現金のみ、それぞれ五百円・九百円・千円が抜きとられていた。が、幸いにも他クラスに被害はなかった。

①三Cの教室が、裏門から一番近い所に位置していること②当日、裏門は開けたままにされていたこと、などから犯人は校外者である可能性が強い。

この事件の起きた原因・対策について松浦先生は、

「裏門は、ジュースの自動販売をしている会社の車をいれるために開けたままにされていた。しかし今後はできるだけ閉めるようにする。それと同時に、校内の巡視などもする。犯人については、いわゆる〝学校あらし〟のしわざなのか、本校の生徒なのかハッキリしない」

と、言っていた。

最近、部外者のしわざと思われる〝部室あらし〟も起きており、教室・部室の充分な管理が必要。

全般的に不調
陸上・水泳だけは好成績

五月の高知市体育祭につづき、六月にはインターハイ県予選ほか数々の大会が行なわれ、本校からも多数の運動部が参加し、日頃の練習の成果を発揮した。

インターハイ県予選では、バトミントン部男子ダブルス、剣道部、軟式庭球部男子ダブルス、弓道部、卓球部男子ダブルスなどが予選を通過した。

〈柔道部〉

五月三日、致道館で開かれた高知市体育祭につづき、準決勝まで進出したが高知商業高校に一対一で内容敗けした。

また、五月十日には、野市の青少年スポーツセンターで、県下武道大会が開かれた。しかし第一回戦でまたしても高知商業高校に敗れた。なお、中学は、優勝戦にて高知中学校に二対〇で敗れ惜しくも優勝を逃がした。

また、インターハイ県予選は、六月七日に県警察学校で行なわれ、準決勝まで進出したが中村高校に敗れ第三位となった。個人戦では軽量級で中川光君（三H）が第三位、重量級で、竹林檎男君（三H）が第二位にそれぞれ入賞した。

〈剣道部〉

高知県高校選手権兼インターハイが六月十二日、十三日の両日に開かれた。第三回戦で優勝候補の西校を破り、準決勝に進出したが山田高校に敗れ、第三位となり、インターハイ四国予選出場の権利を獲得した。

〈軟式庭球部〉

六月六日、七日両日に行なわれたインターハイ県予選における本校軟式庭球部は第三位に入賞し、個人では下谷・政光両選手がベスト8に進出した。なお、団体では中村高校に破れ、四国予選に出場できないが個人戦の両選手は同大会に出場が決まった。

また、中学では五月十七日に行なわれた高知市体育祭におき、上田・杉村両選手が第三位に、片岡・沢近両選手がベスト8にそれぞれ入賞した。

〈弓道部〉

五月三日に行なわれた春季選手権県大会において団体は二位に、個人は岡村達兄選手（二〇）が五位に入賞した。

また、六月十四日に行なわれたインターハイ県予選においては、出場予定校の内一校が棄権したため本校を含めてすべての学校が四国大会への出場権を獲得した。

部長の安岡君は、一応試合は行なわれたがまるで調子がでず、もし一校が棄権していなかったらあぶなかったと、いささか心細い話であった。

〈野球部〉

本校野球部はこのところ二十戦利なく、十勝八敗二引分け、一つの完全試合、二つのノーヒット・ノーランの記録を樹立するなど素晴しい成績をおさめた。しかし対高知商業の春期四国大会県予選では、惜しくも三対六で敗れて四国大会への出場は成らなかった。

〈ソフトボール部〉

六月六日にあった対学芸の練習試合は、学芸松田、土佐橘の両投手の先発で始り、橘は失点をよく守り、打撃面では、七回宿我の逆転ツーランホーマーで二対一と勝利を飾った。しかし六月十三日の対高知農高とのインターハイ県予選では別役投手におさえられ、インターハイ出場は成らなかった。

〈陸上部〉

中学の市体で梅下君（三B）が百㍍で十二秒一を出し一位に、二百㍍では金田君（三D）二千㍍でまた、六月七日に高知市営球場で春の選抜高校野球の準優勝校の北陽高校を迎えて練習試合を行った。当初の予想では一ノ二点とれば上出来ということであったが、攻撃面では調子がよく三点を挙げた。しかし、投手の不調やタイムリーエラーの続出で六点を失い、結局三対六で敗れた。

〈ソフトボール部〉

六月六日にあった対学芸の練習試合は、学芸松田、土佐橘の両投手の先発で始り、橘は失点をよく守り、打撃面では、七回宿我の逆転ツーランホーマーで二対一と勝利を飾った。しかし六月十三日の対高知農高とのインターハイ県予選では別役投手におさえられ、インターハイ出場は成らなかった。

〈陸上部〉

中学の市体で梅下君（三B）が百㍍で十二秒一を出し一位に、二百㍍では金田君（三D）二千㍍でまた、六月七日に高知市営球場で春の選抜高校野球の準優勝校の北陽高校を迎えて練習試合を行った。当初の予想では一ノ二点とれば上出来ということであったが、攻撃面では調子がよく三点を挙げた。しかし、投手の不調やタイムリーエラーの続出で六点を失い、結局三対六で敗れた。

〈ソフトボール部〉

六月六日にあった対学芸の練習試合は、学芸松田、土佐橘の両投手の先発で始り、橘は失点をよく守り、打撃面では、七回宿我の逆転ツーランホーマーで二対一と勝利を飾った。しかし六月十三日の対高知農高とのインターハイ県予選では別役投手におさえられ、インターハイ出場は成らなかった。

〈水泳部〉

四月に行なわれた高知県室内選手権で北村龍二君（一C）が二百メートル個人メドレーで二分五十四秒で一位、百メートル自由型で二位に、また、長尾和威君（一T）も二百メートル自由型で二分十五秒で一位に、百メートル自由型で三位にそれぞれ入賞した。

インターハイ県予選でも、百㍍で津野君（一S）が二位、二百㍍では三位に入賞した。また、百メートルジュニアハードルで二位に、二百㍍では三位に片岡君（三K）が、走り高飛びでは福島君（二O）が二位にそれぞれ入賞した。

〈水泳部〉

四月に行なわれた高知県室内選手権で北村龍二君（一C）が二百メートル個人メドレーで二分五十四秒で一位、百メートル自由型で二位に、また、長尾和威君（一T）も二百メートル自由型で二分十五秒で一位に、百メートル自由型で三位にそれぞれ入賞した。

インターハイ県予選でも、百㍍で津野君（一S）が二位、二百㍍では三位に入賞した。また、百メートルジュニアハードルで二位に、二百㍍では三位に片岡君（三K）が、走り高飛びでは福島君（二O）が二位にそれぞれ入賞した。

編集後記

「今度こそ新聞発行が試験と重ならないようにやるぞ〳〵」と決心したのは大昔の話。以来この目標は尽く打ち破られて来たが「今度こそ重ならんようやるぞ〳〵チキショウ〳〵」なんて言っているうちはまだよかった。回を重ねるにつれて、「今度こそ重ならないようやります」となり、だんだん弱気になって次は「今度こちょ重ならないようやりまちゅ」まだまだ「今度こちょ（クスン）重ちゃにやりゃにゃいようやりまちゅーん（クスン）」となってくると編集長はいつもOBにいじめられっぱなし。さて今回は発表の後に発行となったが、何とか恒例の試験中の印刷所通いからまぬがれた。しかし梅雨のうっとうしい毎日に編集も思うように運ばず、いらだちの気持から中一部員になり散らすのも一日に一度や二度。いやいや五度や六度。少々のどが痛むなんのことやら。それから写真部の山下君にはずばらしい写真を撮っていただき、厚く感謝しなければなりません。

▼おわび▲

前号新任紹介の西峯先生は関西学院大学となっていましたが、関西学院大、大学院卒、また永野先生の昭和二十年生を昭和二十二年と、短信の西森先生の住所、春野町を伊野町と訂正します。数多くの誤りを残した事をおわびします。特に永野先生には、デリケートな心を傷つけはしなかったかとそれが気がかりです。

もう今日でおしまいだ

東京での二日目。またバスに乗って今度は横浜に向かう。旅行に出発する前、D先生に「東京へ行くと劣等感を味わうぞお。どこの田舎者かと見られるぞお。ばかにぞお。イヒヒ」と何度も教え込まれたため、僕達は多少先入観を持って東京の人を敵視、もしくは必要以上に小さくなっていたところもあり、中には旅館に入るなり女中さんをにらみつけている者もあった。僕なんかも意識過剰の方でこうやって、団体と一目でわかるようなりをして、バスにつめ込まれていることに内人バス（こんな言葉があるかどうか僕は知らないが）を覗き込まれるに似た不安と屈辱を覚えた。実際、制服のことは暑い中（バスの中では正にそうだった）でもあったせいか、僕は多少気にしていたし、気にかけてもいた。東京ではこんな明治時代の遺物は残らずとは言わないまでも、殆どお目にかからないのではないかと想像し、期待していたのだ。しかし、あにはからんや、ソロソロ制服の群れがバスの五メートルばかり先を行進して行った。どうやら登校時の高校生だ。あまかった。やっぱり日本か。だが発見！誰も帽子をかぶっていない。頭の上から時の流れに向かって脱皮するのか、と僕は字誤りの句を読んだ。それから後はバスのゆれにまかせて眠った。高速道路は速いでしょう。これからしばらくは快適ですよ、というのを夢の中で聞いていた。

その夜、修学旅行最後の夜だけに、はなやいだ雰囲気が続いた。中三、そして高二。僕達にとって修学旅行という言葉も現実もこれで最後だった。楽しかった奴も、泣いた奴も今夜はふとんの中で振り返ってみるだろう。みんなそれぞれにいい思い出を作ったことだろう。何かが芽生えたという二人もある。Iのこときは毎晩やって来て「おい。くそ。〇〇と××が歩きよったぞ。へへのところには女がきそいに行ったぞ」と言って「おい。くそ。俺はアタックに失敗した。なぐさめてくれ。ちくしょう」とふとんにもぐり込むのだった。修学旅行で生まれた愛に光栄あれ。

朝は早かった。六時の「ひかり号」に乗って帰途に着く。帰りは何となくつまらないものだ。しかし途中、富士山が見えた。二日目中腹まで登って行ってもうしてもその姿を見せなかった富士が、その日は気持ちよく雲をはらい光を浴びていた。（T・U）

女生徒にかこまれて、ハイ、パチリ